

中国東北地方における金代の遺跡遺物 —近年の考古学発見を中心にして—

徐光輝（龍谷大学）

12世紀の初め頃から興った女真は金国（1115～1234）を建立し、わずか十数年の間に遼国と北宋王朝を滅ぼし、現在の中国東北地方のほか、華北地方とロシアの沿海州の一部を含む広大な版図を有するようになり、また南宋王朝と100年以上対峙していた。その後、金は西夏と前後にしてモンゴルによって消滅され、南宋も1279年には後者によって滅びる。

金は120年の間、非常に複雑な民族関係の中で、遼の政治制度に類似する五京制と南北両面官制度を実施するが、その五京制の背景には古くから親縁関係にあった渤海の多京制の影響があったかも知れない。前期の首都である上京会寧府は黒竜江省ハルビン市の近くにある阿城市の郊外に置かれるが、海陵王は保守勢力の反対の中で、都を現在の北京市街地の西南部、即ち従来の唐幽州都督府・遼南京析津府に移し、支配の重点を華北地方に置き、南宋との対峙を強め、江南の統一を図ったようである（中都）。

このような歴史状況の中で、金の考古学文化の特徴は地方によって異なる。華北地方は唐、北宋以来の漢民族文化の伝統文化が根強く残っており、上京を中心とする内地には女真族の伝統文化が著しいが、南からの漢民族文化と西からの契丹族文化の影響が見られる。

東北地方における金代の遺跡調査は戦前に始まる。重要なものとして上京会寧府址、長春市郊外にある金初の完顔希尹墓、完顔娄石墓、撫順市大官屯窯跡などが挙げられる。

戦後の調査は次第に東北、華北全域に広がるが、類別に見れば次の通りである。

1. 城址の調査

上京会寧府址

阿城市の白城子に所在し、近くに阿什河と張広才嶺がある。

天会3（1125）年	乾元殿
天会13年	慶元宮
天眷元（1138）年	敷徳（朝殿）、宵衣（寢殿）2殿
同年、上京会寧府と称す	
貞元元（1153）年	海陵王遷都、「消上京之号」
正隆2（1157）年	上京の宮殿群を壊し、宗廟を中都に移す
大定13（1173）年	世宗は上京之号を回復する
大定21年～	上京の宮殿群と城壁を補修するが、皇帝たちは中都に住むことが多い。

現存する上京遺跡は、地表調査により南北2城からなる長方形の平面プランを有する。

北城は南北の長さ1828、東西1553m、南城は南北の長さ1528、東西2148m。両城の間に共用の城壁があり、1門が設けられている。総長11000m、22華里に近く、『金史』の記録とほぼ同じである。

城壁は幅3～10、高さは3～5m残っており、馬面は82基（一説89基）、門址は11基（9基とも？）、その内、甕城が5基あり、周りに護城河を廻らす。

皇城は南城の中の西北部にあり、南北645、東西500mの長方形を成す。那珂には南北に並ぶ五つの基壇址があり、両側には回廊址がある。北の2基は平面「工」字形であり、北宋都城のそのものとよく類似し、最も重要な宮殿であると推定される。1983年吉林大学の地表調査で白磁赤色龍文盤の残欠などの遺物が見つかった。

全体的に言えば、遼の上京などに類似し、南城には皇城のほか、貴族らが居住し、北城は精錬、製作などの工房区のほか、商工や一般庶民の居住区である。

このほか、上京の内外から「宝嚴大師塔銘誌」、「曹道士碑」、伝完顔阿骨打陵などの遺跡遺物が知られている。

一方、金の中都も近年水関遺跡が検出されるほか、その四至や宮殿の所在位置などが次第に確認されている。

また、黒竜江省文物考古研究所は今年の301国道拡張工事に伴う緊急調査で、阿城市亜溝鎮劉秀屯の東南100m余りのところで大規模な宮殿群跡を確認した（映像資料参照）。

2. 陵墓

伝完顔阿骨打陵の真偽について諸説あるが、今後の発掘調査に待たねばならない。

ところが、北京市以南の房山区にある金陵は、明末の破壊によって地表建築はほとんど残っておらず、近年北京市文物考古研究所の調査によって陵区の範囲、数量、一部の宮殿、神道及び関連遺物が出土している（映像資料参照）。

貴族墓については、阿城で見つかった金齊国王夫婦墓（映像資料参照）、吉林省舒蘭市完顔希尹家族墓群が非常に重要であり、また長春市文物管理委員会は郊外の完顔娄石墓の地表調査を行っており、最近旅順博物館に所蔵されているその一部の副葬品が注目されている。

このほか、華北地方を含む各地域で大量の多種類にわたる金墓が調査された。

3. 手工業遺跡遺物

製鉄に関連する遺跡は阿城近くで見つかり、主に副葬品として大量の鉄器や陶磁器が出土した。また戦前大官屯窯跡の一部の出土品は現在旅順博物館で整理されている。